

# 女性と音楽研究フォーラム 会報 第4号

Bulletin of Women & Music Study Forum Vol. 4 (Feb. 2004)

目次	2003年度第3回例会発表要旨(高橋美雪) .....	2
	2003年度第4回例会発表要旨(小林緑) .....	4
	2003年度第5回例会発表要旨(川嶋ひろ子) .....	6
	ソフィー・ドリンカー研究所(玉川裕子) .....	12
	遅咲きの花-IAWM メーリングリストの 話題から(西阪多恵子) .....	14
	会員自己紹介コーナー .....	16
	コンサート情報 .....	18
	レクチャー報告(藤村晶子) .....	18
	女性と音楽研究フォーラム規約 .....	19
	ニュース etc. ....	20

## 成功させよう！コンサート

女性作曲家を聴く・その6

19世紀フランス室内楽の頂点を極めた女性作曲家！



### ルイーズ・ファランク

Louise Farrenc (1804-1875)

生誕 200 年記念コンサート

2004年10月30日(土)14:00～ 於:東京文化会館小ホール

(詳細は18頁)

## 2003年度第4回例会 発表要旨

日時：2003. 11. 1 (土) 9:00~12:00

会場：中野区勤労福祉会館 3F 会議室2

### 教育者=理論家としてのルイズ・ファランク

小林 緑 (こばやし みどり)

本2004年はフランスの女性作曲家ルイズ・ファランク(1804-1875)の生誕200年にあたる。当フォーラムではHPなどでもすでに予告の通り、10月30日午後、東京文化会館小ホールにて記念コンサート開催を決定、徐々に準備を進めている。そこで今回、ファランクその人について改めて見直し、同時に彼女をめぐる世界の動きについてご報告する。

そもそも私が女性作曲家に“開眼”したきっかけが、このファランクのフルート三重奏曲。「その堅固な造りに支えられた流麗な美しさに強くひきつけられたからだ」とは、フォーラムのメンバーも多数執筆陣に加わっている拙編著『女性作曲家列伝』のファランクの章で私が書いた一節…という次第で、ファランクの紹介はこの『列伝』(およびファランク研究の基本文献である Bea Friedland: Louise Farrenc, 1804-1875: Composer, Performer, Scholar, 1975, Michigan)に譲るとして、本発表では『列伝』で十分に触れられなかったファランク(以後 LF)の教育・理論的業績について整理してみたい。

#### I. 『ピアニストの宝典 Le Trésor des Pianistes』(1861-1872, ファランク社)

16世紀ヴァージナリストから19世紀ショパンなど同時代をカバーしたフランス初の鍵盤音楽集成という歴史的意義を持つ本コレクションの発案は確かに夫アリスティード、しかしその急逝(1865)後は、LF一人、あくまで原典主義に依りつつ全20巻を完成させた。その序巻には「装飾記号について Des Signes d'Agréments」と題し17,18世紀のクラヴサン奏者が用いた略記法(装飾記号)についての解説文が載っている。これは1842年から30年あまり、パリ音楽院ピアノ科正教授の任にあったLFが

演奏家・教育者としての実績を踏まえつつ著した演奏の手引きで、LF没後1895年、「装飾法概略」と表題を改めルデュック社から独立して刊行された。古い音楽にあつては装飾が本質的要素であること、しかしその用法や記号は国および個人によりさまざままで、実際の音として響かせる上で肝要なのはあくまでよき趣味と経験だ…先人たちの裏付けを得たLFの言い分は説得力に富む。同じ序巻に「演奏全般への所見 Observations generales sur l'exécution」と題する別の一文があり、アリスティードの執筆と目されているものの、上記「装飾法」も同じく無署名であったことから、こちらも実はLFの書き下ろしでは…と推測される。自ら興した出版業(1820)と学術調査は夫、演奏にかかわる実践面は妻と、夫妻は合理的役割分担を実施していたからである。

#### II. 『ヴィグリーのピアノ奏法 Méthode de Piano par Viguier』(1843, コロンビエ社)

ピアニスト・教師・楽譜出版業者としても大成功を収めたベルナル・ヴィグリー(Bernard Viguier 1761-1819)の表題書をLFが改訂・編纂したもの。18世紀末の刊行後1870年代まで版を重ね、スペイン語翻訳さえ出た原本は、簡易な小曲、演奏記号の説明、目的別の練習曲、最後にバロック風の小節線のないプレリュード12曲を収めるという特異な構成。19世紀最大の理論家フェティスは「これほど凡庸にして問題の多い教則本は類がない」と酷評したが、より高度の技術的練習課題曲と19世紀当時の有名オペラからの抜粋曲を加えて、いっそう親しみやすくしたファランク版からは、編者のピアノ教師としての現実的な意図と手法が読み取れるように思う。ちなみにこの改訂版については上記フリーランドの書でも後述するファランク全集版でも一切言及がないのはなぜだろうか？

#### III. 『ピアニストの学び L' Ecole des Pianistes』(1876, ルデュック社)

おそらくLFの追悼出版であろう、本コレクションには既刊の練習曲集4巻(op.50,42,41,26)の再刊

と、「ピアニストの転調練習 .Exercices du Pianistes sur les modulations」と題する説明つき譜例集が収められている。なかで最後の「転調練習」は絶えて久しいこのルデュック版によってのみアクセスできるまことに貴重な資料だ。まずは著者の巻頭言を聞こう：

「和声の知識がない人は、二つないしそれ以上の、互いに関連のない楽曲を続けて独奏したり伴奏したりする場合、たいてい困惑する。困らないにしても、およそ滑らかさを欠く転調を無理に行うか、別の新しい調いきなり入ってしまい、至極耳障りな感じにしてしまうものだ。けれども、以下に収めた四つのタブロー [Tableau] を全ての音度上に移して勉強すれば、あらゆる転調をこの上なく簡潔にして満足に行く形で実行できる。たとえば変イ長調の曲とニ長調の曲、または変ロ長調とイ短調の曲を、きちんと準備され、聴き手の不快を招かぬように、つなげて弾くことができるであろう…」。

さてその四つのタブロー (T) とは：

1T=長調から長調へ (7 曲+11 例) → 2T=短調から長調へ (3 曲+12 例) → 3T=長調から短調へ (3 曲+12 例) → 4T=短調から短調へ (4 曲+11 例)

1T を例に説明すると、ハ長調から出発した四声進行が、転調を挟みつつ残る 11 の長調に到達する和声パッセージ 11 種と、その転調進行に即した本物の短い楽曲七つが提示されているのである。こうしたいかにも実践的な転調指南に私が強いインパクトを受けたのは、フェルッチョ・ブゾーニ (1866-1924) の 1922 年録音のショパン演奏 [Pearl GEMM CD9347] が思い出されたからだ。ここでブゾーニは、イ長調の前奏曲第 7 番と、変ト長調の練習曲『黒鍵』の二曲の間に自由な即興的つながりを入れ、あたかもひとつの楽曲であるかのように弾いていたではないか…関連のない別の調の曲を二つ弾く場合には、滑らかな転調パッセージを曲間に挿入する必要があるという上記 LF の言は、まさに 20 世紀初頭にまで及んだ当時の演奏実践・習慣の背景を証すものと捉えられよう。

ところでこの没後出版に載った四つの練習曲集

のうち、op.26、すなわち『全ての調による 30 の練習曲 Trente etudes dans tous les tons majeurs et mineurs』(1838) については『列伝』でもかなり詳しく記したので、ここでは省略する。ただ、パリ、ブリュッセル、ボローニャの各音楽院でピアノ必修教材に指定されたこの全調エチュードを、およそ 150 年も遅ればせながら、このところ数年、私も国立音楽大学 3 年ピアノ科学生に 3 曲ずつ夏休みの課題として与え、実技練習と楽曲分析に当たらせている。ところが、その結果に見るジェンダー・ギャップがすさまじい。女子 (90%) がおおむねこの曲集との出会いを積極的に受け止め、「女性作曲家を知らずに過ごすのは罪」とまで言い切る者がいたのに反し、圧倒的少数派の男子はハナから「論評に値しない」とばかり感情的に反発し、まじめに取り組んだのはごくわずか…女性の作品を取り込むことが音楽大学の男女共同参画へのもっとも有効な早道と心得ている私としては、改めてジェンダーの壁の厚さを思い知らされた次第である。

最後に LF をめぐる世界の動きをまとめておこう。まず、1998 年にドイツ学術振興財団の助成を受けスタートしたドイツ・オルデンブルク大学のフライア・ホフマンを中心とする『ファランク・エディション』全 13 巻が、2003 年秋にめでたく完結した。もちろん、その記念コンサートとシンポジウムも 2004 年 5 月末の一週間、予定されている。先立ってスイスはベルンに本拠をおく「女性と音楽フォーラム FMF」が、去る 1 月 23 日から 3 日連続のコンサートを盛況裡に終えたばかり。このコンサート・シリーズの前夜には、上記全集版編集者の一人クリスチーネ・ハイトマンが招かれ、講演したとのこと。私たちフォーラムの今秋のコンサートは一日だけ、規模はぐっと小さいが、佐久間由美子をはじめとする日本の名手を揃えた演奏陣の質は決してヨーロッパ勢の企画にひけをとらない。当日のプログラムにはこれらヨーロッパからのアクチュアルな情報も組み入れて作成し、演奏・研究ともに充実した内容をお客様にお届けできるよう、心に期している。

[2004/1/30 記]

## 2003年度第5回例会 発表要旨

日時：2003. 12. 23 (火) 9:00~12:00 会場：中野区女性会館

### 日本および欧米の音楽大学における「女性作曲家作品」演奏状況に関するアンケート結果：分析と傾向

川嶋 ひろ子 (かわしま ひろこ)

作品や作曲家が認知されるには、まず演奏され、情報として多くの人達の耳に入り、素晴らしい作品であることを認められる必要がある。その第1段階である「演奏する」ことが、女性作曲家の作品ではどの程度行われているか。また、女性作曲家についての情報がどの程度与えられているか。音楽を専門的に学び、将来演奏家として、また教育者として一般の人々や子供達に音楽を伝える役割を持つ人材を育てる音楽大学の現状を知るため、アンケート調査を行った。調査内容は次のようなものである。

#### 1. アンケート調査内容

・過去おおよそ5年間についてお答えください。

- 1) 学内の [試験] において女性作曲家の作品が演奏されたことがありますか。  
ある場合は、演奏された女性作曲家の名前と演奏形態を書いて下さい。
- 2) 学内の [学生による演奏会] において女性作曲家の作品が演奏されたことがありますか。  
ある場合は、演奏された女性作曲家の名前と演奏形態を書いて下さい。
- 3) 学内の [先生による演奏会] において女性作曲家の作品が演奏されたことがありますか。  
ある場合は、演奏された女性作曲家の名前と演奏形態を書いて下さい。
- 4) 学外の [公開演奏会] において女性作曲家の作品を演奏することがありますか。  
・よく演奏する ・時々演奏する ・たまに演奏する ・まったく演奏しない  
演奏される場合、演奏された女性作曲家の名前と演奏形態を書いて下さい。
- 5) [西洋音楽史のテキスト] の中に、女性作曲家の名前が書かれていますか。  
書かれている場合、書かれている女性作曲家の名前を書いて下さい。

#### 2. アンケート集計・分析と傾向

##### 1] 問合せ先と、回答が送られて来た国別大学数

- ・アンケート送付にあたり文章を英文・独文・仏文に翻訳し、各国・地域に最も適していると思われる文章を用いた。
- ・アンケート送付はEメール及びレターメールで行った。

国 名	問合せ先	回 答 (率)	具体的回答	その他の回答
オーストリア	3	1 (33%)	1	0
ベルギー	3	0 (0%)	0	0
デンマーク	5	0 (0%)	0	0
フィンランド	1	1 (100%)	0	1
フランス	10	4 (40%)	2	2
ドイツ	22	13 (59%)	4	9
イギリス	13	3 (23%)	1	2
オランダ	7	0 (0%)	0	0
ハンガリー	2	1 (50%)	1	0
ルクセンブルク	2	1 (50%)	0	1
ノルウェー	4	0 (0%)	0	0
ポーランド	3	0 (0%)	0	0
スウェーデン	2	0 (0%)	0	0
スイス	5	3 (60%)	1	2
アメリカ	82	18 (22%)	9	9
カナダ	38	4 (11%)	0	4
日本	28	15 (54%)	14	1
計	230	64 (29%)	33	31

##### 【分析と傾向】

- ・アメリカからの回答にはアンケート調査への関心や、協力的な姿勢を示す文面が多かった。しかし女性作曲家

への認識や演奏状況は、地域や学校の規模によってかなり差があるように思われる。

- ・ドイツからの回答には、年間の演奏会の回数が200回から300回を教え、そのプログラムを調べるのが大変難しいという文章を添えたものが多かったが、女性作曲家の作品はごく当たり前のように演奏しているという主旨がほとんどで、演奏会プログラムを送って下さったところもあった。
  - ・オーストリア、スイス、ルクセンブルクの状況はドイツに近く、女性作曲家についてかなり詳しく書かれている西洋音楽史のテキストの同封もあった。
- ①歌からの回答が予想より少なかったが、言語の面で英文での問い合わせや回答に無理があったと思われるふしがあった。

## 2] 演奏形態の記入回答数

演奏形態	鍵盤楽器 (協奏曲、オルガン曲等含む)	声楽 (合唱オペラ等含む)	管楽器 (協奏曲、吹奏楽等含む)	弦楽器 (協奏曲等含む)	打楽器 (協奏曲等含む)	室内楽
記入回数	61	77	50	26	26	68
	102					

### 【分析と傾向】

- ・音楽大学の学生数と教員数を専攻別に比較すると、ほとんどの大学で鍵盤楽器専攻の人数が最も多いが、女性作曲家の作品を取り上げる頻度は比較的少ない。その理由として ①鍵盤楽器の作品は非常に数が多く、新しいもの、または珍しい作品を扱う必要がない。 ②単独での演奏や指導が中心であり、継承的な要素が強く、新しい物や珍しい物を取り入れる自由な雰囲気が薄い。などが考えられる。
- ・声楽作品がよく演奏される理由として ①曲が短く取り組みやすい。 ②多人数による共同作業という場面では新しい試みは新鮮味を与え、取り入れ易い。などが考えられる。
- ・管楽器と打楽器については、現代の作曲家の作品が多く演奏されている。その理由として、昔は管楽器や打楽器のソロ演奏の作品が少なく、近現代以降に楽器や演奏法の発達に伴い、ソロ演奏用の作品が数多く作られるようになった。それに伴い、現代女性作曲家の作品が演奏される頻度も多く、日本の女性作曲家の作品が欧米でも演奏されているのは注目に値する。

## 3] 出生年区分別回答数

出生年区分	回答数
～1800年	10
1801年～1900年	24
1901年～	79
不詳	26

### 【分析と傾向】

- ・20世紀を迎えるまで、女性に対する音楽教育や社会での活動の拘束は歴然としたものであった。その状況の中に於いても作品を残し、後世に認められている作曲家がいることも確かである。
- ・1900年以降女性も等しく音楽教育を受け、作曲家・作品ともに広く音楽界に活躍している方向性が伺える。
- ・アンケートには、音楽大学作曲専攻生の名前と作品の記入がいくつかあった。紙面の関係上今回は集計に加えていないが、その中には現在すでに音楽界で活躍している人がいる可能性も考えられる。
- ・今回のアンケートに際し、当初1900年以前に出生した作曲家（いわゆる西洋音楽史の範囲内）について問い合わせるつもりであったが、作曲者の出生年を調べるという煩わしさを考え、特に出生年を限定しなかった。それに伴い現代作曲家の割合が大多数を占めたが、彼女たちもこれからの音楽史を担う作曲家であり、将来へむけての活躍を期待するものである。

## 4] よく取り上げられる作曲家ベスト7

今回のアンケートにおいて、具体的に記入された回数の多い名前を順に挙げる。  
また、各質問項目に記入されたべ回数を挙げる。

順	名前	生没年	出身国						計
				1	2	3	4	5	
1	Clara SCHUMANN	(1819-1896)	ドイツ	9	5	10	5	10	39

2	Fanny MENDELSSOHN HENSEL	(1805-1847) ドイツ	4	5	5	1	5	20
3	Cécile CHAMINADE	(1857-1944) フランス	7	4	2	1	4	18
4	Amy BEACH	(1867-1944) アメリカ	1	3	2	1	7	14
5	Lili BOULANGER	(1893-1918) フランス	0	1	2	1	6	10
6	Germaine TAILLEFERRE	(1892-1983) フランス	2	1	1	1	4	9
"	Barbara STROZZI	(1619-1677) イタリア	1	3	2	0	3	9
"	Grazyna BACEWICZ	(1909-1969)ポーランド	2	2	2	1	2	9
"	Sofiya GUBAYDULINA	(1931- ) ロシア	4	1	1	1	2	9
"	Ruth CRAWFORD SEEGER	(1901-1953) アメリカ	1	3	2	0	3	9
7	Keiko ABE	(1937- ) 日本	2	3	1	2	0	8
"	Libby LARSEN	(1950- ) アメリカ	1	3	1	1	2	8
"	Pauline VIARDOT	(1821-1910) ドイツ	1	2	1	0	4	8

#### 【分析と傾向】

- ・年代で視るとロマン派の作曲家が上位を占め、作曲家と作品が共に知られるまでには時間が必要なことが伺える。しかし、ベスト7には、様々な時代、出身国の女性作曲家が挙げられており、大変興味深い。
- ・上位7位までは、現代の作曲家であっても、ほとんどの作曲家名が2回以上、西洋音楽史などのテキストに記述されているという結果が出ているが、日本の安倍圭子の名前が1度も出ていない。自国の現代作曲家に対する認識の仕方に、欧米と日本との間にずれが感じられるのではないだろうか。

#### 結び

2003年4月、ルクセンブルクの音楽学者ダニエル・ロスター (Daniëlle Roster) 女史と会見する機会を得た。その折、ヨーロッパの音楽大学における女性作曲家作品の演奏状況を尋ねたところ、様々な演奏形態によって、ごく当たり前の様に演奏されているという答えが返ってきた。私の専門であるピアノに関して述べると、日本の音楽大学においては、女性作曲家の作品が試験や演奏会で取り上げられることはごく稀であり、珍しい特別な存在という認識ではないかと思われる。女性作曲家作品の中には素晴らしい作品が数多くあるが、耳に触れる機会がごく少なく、評価を受ける段階にまで未だ達していないのではないだろうか。日本の、そして欧米の音楽大学での現状は如何なるものか、アンケート調査を試みた。アンケートの結果、私の予想を上回る数多くの女性作曲家の具体名が挙げられ、少しずつではあるが、着実に認知されつつある現状を把握することが出来た。アンケート調査を依頼した音楽大学は世界の中の一部であり、回答を送って頂いた音楽大学と、そして直接記人に携わって頂いた音楽大学関係者はごく一握りである。その一握りの回答から139名にのぼる具体名が挙げられたことは大変興味深い。この139名以外の当然列挙されるべき名前が、たまたま記入されていないことも当然考えられ得る。また、ピアノ以外の演奏形態では、Cécile CHAMINADE のフルート作品や安倍圭子のパーカッション作品など、日本においてもよく演奏されており、女性作曲家作品の認知に関する日本の今後の方向性が見られたように思う。このアンケート調査の結果を参考に、音楽大学のみならず広く音楽界において多くの人達が女性作曲家の作品にも目を向け、素晴らしい作品を演奏して下さることを望むものである。

#### [参考文献]

1. "Musik Almanach 1999/2000 Daten und Fakten zum Musikleben in Deutschland" Gustav Bosse Verlag bärenreiter-Verlag, 1999.
2. Ronald Cavaye, 『音楽家のための留学ガイドー世界の音楽学校 332 校の紹介ー』芸術現代社、1994年。
3. 『音楽大学学校案内 '03』音楽之友社、2002年。

#### [付表の典拠資料]

1. "The New Grove dictionary of women composers" Ed. by Julie Anne Sadie and Rhian Samuel, Macmillan, 1994.
2. "International encyclopedia of women composers" Ed. By Aaron I. Cohen. 2nd.ed, Books & Music, 1987.
3. "Komponistinnen von A-Z" Ed. by Olivier Antje, Tokkata, 1988.
4. "Black women composers" Hildegard Pub., 1992.
5. 『日本の作曲家一覧』 信時裕子編、国立音楽大学附属図書館、1990。
6. 『国立音楽大学図書館典拠ファイル』

付表 アンケートに記入された女性作曲家リスト

「表記法」・氏名の表記は音楽辞典、人名辞典などに合わせ姓（大文字）名（小文字）とする。

・[ ] 補足, [né ]旧姓, ( ) 洗礼名・通称等 \* 不詳

姓, 名	生没年	出身国	記入回数
ABE Keiko [ 安倍 圭子 ]	(1937- )	日本	8
ALBERGA, Eleanor	(1949- )	イギリス	2
ALI-ZADEH, Franghiz	(1947- )	アゼルバイジャン	4
ALTAN, Sinem	*	*	2
ANDERSON, Laurie	(1947- )	アメリカ	1
Anna Amalia von Preußen	(1723-1787)	ドイツ	1
ARAI Chieko [ 新井 千悦子 ]	*	日本	1
ARCHER(BALESTRETI), Violet	(1913-2000)	カナダ	1
ASAI Rie [ 浅井 梨愛 ]	*	日本	1
AUFDERHEIDE, May	(1888-1972)	アメリカ	2
BACEWICZ, Grazyna	(1909-1969)	ポーランド	9
BADARZEWSKA-BARANOWSKA, Tekla	(1834-1861)	ポーランド	3
BARLOW, Cynthia	*	*	1
BAUER, Marion Eugenie	(1982[1987]-)	アメリカ	1
BEACH[né CHENEY], Anna Amy Marcy	(1867-1944)	アメリカ	14
BERBARIAN, Cathy	(1925-1983)	アメリカ	1
BIRNSTEIN, Renate	(1946- )	ドイツ	1
BLEY [né BORG], Caria	(1938- )	アメリカ	1
BOLL, Christine E.	(1931- )	ドイツ	2
BONIS, Melanie(Helene)[Mel-Bonis]	(1858-1937)	フランス	2
BOULANGER, Nadja(Juliette)	(1887-1979)	フランス	2
BOULANGER, (Marie-Juliette Olga) Lili	(1893-1918)	フランス	10
BUEHLMAN, Barbara	*	*	1
CACCINI, [RAFFAELLI-SIGNORINI-MALASPINA], Francesca	(1587-1638)	イタリア	4
CANAT DE CHIZY, Edith	(1950- )	フランス	2
CAPERS, Valerie Gail	(1935- )	アメリカ	2
CARRENÓ, Teresa	(1853-1917)	ベネズエラ	2
CHAMINADE, Cécile	(1857-1944)	フランス	18
CHANCE, Nancy Laird	(1931- )	アメリカ	1
CHEN, Chin-Chin	*	*	1
CHO, Eun-Hwa	*	*	2
CLARKE[FRISKIN], Rebecca(Thacher)	(1886-1979)	イギリス	5
CRAWFORD(SEEGER), Ruth (Porter)	(1901-1953)	アメリカ	9
DECKER, Pamela	*	*	2
DESPORTES, Yvonne	(1907-1993)	フランス	1
DIEMER, Emma Lou	(1927- )	アメリカ	1
DINESCU-LUCACI, Violeta	(1953- )	ルーマニア	1
DRAGONY, Timea	*	*	1
DUKE, Charis Bean	(1967- )	*	1
DUSSEK[né CORRI], Sophia (Giustina)	(1775-1847)	イギリス	1
EMELIANSEVA, Irina	*	*	2
FARRENC[né DUMONT], (Jeanne-)Louise	(1804-1875)	フランス	4
FINZI, Graciane	(1945- )	フランス	1
GALBRAITH [né, NANCY], Riddle	(1951- )	アメリカ	1
GALINNE(GLUCHOWICZ), Rachel	(1949- )	イスラエル	3

GARDINER, Mary	(1874-1967)	アメリカ	1
GIBLIN, Irene	(1888-1974)	アメリカ	2
GIRAUD, Suzanne	(1958- )	フランス	1
GITTECK, Janice	(1946- )	アメリカ	1
GOTKOVSKI, Ida	(1933- )	フランス	1
GREENBLATT, Deborah	*	*	1
GRØNDAHL, Agathe Backer	(1847-1907)	ノルウェー	2
GROSSO, Cheryl	*	*	1
GUBAYDULINA[GUBAIDULINA], Sofiya Asgatovna	(1931- )	ロシア	9
HARA Kazuko [原 嘉壽子]	(1935- )	日本	1
HARRIS, Marilyn	*	*	1
HENSEL [née MENDELSSOHN(Bartholdy)], Fanny(Cäcilie)	(1805-1847)	ドイツ	20
Hildegard of Bingen	(1098-1179)	ドイツ	5
HILL, Edie	*	アメリカ	1
HINDMAN, Dorothy	*	*	1
HOLLOWAY, Robin Greville	(1943- )	イギリス	1
HÖLMES, Augusta	(1847-1903)	フランス	4
HÖLSZKY, Adriana	(1953- )	ルーマニア	4
HOOVER, Katherine	(1937- )	アメリカ	2
HORI Etuko [堀 悦子]	(1943- )	日本	1
JACQUET DE LA GUERRE, Elisabeth-Claude	(1665-1729)	フランス	5
JOLAS, Betsy	(1926- )	フランス	2
KANEKO Hitomi [金子 仁美]	*	日本	2
KATAYAMA Aoi [片山 あおい]	*	日本	1
KINOSITA Makiko [木下 牧子]	(1956- )	日本	4
KOBLENZ, Babette	(1956- )	ドイツ	2
KOLB, Barbara	(1939- )	アメリカ	1
KUBO Mayako [久保 摩耶子]	(1947- )	日本	1
LA BARBARA [née LOTZ-SUBOTNICK], Joan	(1947- )	アメリカ	1
LAITMAN, Lori	(1955- )	アメリカ	2
LARSEN[REECE], Libby[Elizabeth] (Brown)	(1950- )	アメリカ	8
LeBARON, (Alice) Anne	(1953- )	アメリカ	1
LEHMANN, Liza[Elizabeth]	(1862-1918)	イギリス	1
LEONARDA, Isabella [LEONARDI, Anna Isabella]	(1620-1704)	イタリア	1
LILIUOKALANI, Queen of Hawai	(1838-1917)	ハワイ	1
LITTRELL, Laurel	*	*	2
LOCKWOOD, Annea	(1939- )	ニュージーランド	2
LOMBARDINI SIRMEN [SYRMEN], Maddelena Laura	(1745-1818)	イタリア	1
LOUIE, Alexina	(1949- )	カナダ	1
LUTYENS, (Agnes) Elisabeth	(1906-1983)	イギリス	2
MACONCHY, Elizabeth	(1907-1994)	イギリス	2
MAHLER [née SCHINDLER], Alma Maria	(1879-1964)	オーストリア	5
Marianne von Martinez[Anna Katharina]	(1744-1812)	オーストリア	1
McTEE, Cindy	(1953- )	アメリカ	1
MEGVERI, Krisztina	*	*	1
Mendelssohn(Bartholdy)[Hensel], Fanny [→Hensel]	既出	既出	
MENDOZA-LÓPEZ, Elena	*	*	2
MIKAMI Naoko [三上 直子]	*	日本	1
MINEMURA Sumiko [峰村 澄子]	(1941- )	日本	1
MIYAKE Haruna [三宅 榛名]	(1942- )	日本	1



MUNDRY, Isabel	(1963- )	ドイツ	3
MUSGRAVE, Thea	(1928- )	アメリカ	4
NAITOU Akemi [内藤 明美]	(1956- )	日本	1
NAKAZAWA Michiko [中澤 道子]	*	日本	2
NEUWIRTH, Olga	(1968- )	オーストリア	3
OLIVEROS, Pauline	(1932- )	アメリカ	1
NOJISI Mika [大石 美香]	(1967- )	日本	1
OOTA Sakurako [大田 桜子]	(1958- )	日本	1
PAGH-PAAN, Younghi	(1945- )	韓国	2
PRICE, Florence B.	(1953- )	アメリカ	2
PTASZYNSKA, Marta	(1943- )	ポーランド	2
RENIÉ, Henriette	(1875-1956)	フランス	3
RUEFF, Jeanine	(1922- )	フランス	1
SAARIAHO, Kaija	(1952- )	フィンランド	2
SAIDLOVÁ, Jolana	(1969- )	ハンガリー	1
SCHMUCKI, Annette	*	*	2
SCHNEIDER, Maria	*	*	1
SCHONTHAL, Ruth	(1924- )	アメリカ	1
SCHUMANN [née WIECK], Clara	(1819-1896)	ドイツ	39
SEEGER [née CRAWFORD], Ruth 「→CRAWFORD」	既出	既出	
SEITHER, Charlotte	(1965- )	ドイツ	2
SHEPHERD, Adaline	(1883-1950)	アメリカ	2
SIDLER, Natalia	*	*	1
SILSBEE, Ann	(1930- )	アメリカ	1
SIRMEN LOMBARDINI, Maddelena Laura 「→LOMBARDINI」	既出	既出	
SMITH, Sharon	*	*	1
SMYTH, Dame Ethel (Mary)	(1858-1944)	イギリス	2
STROZZI, Barbara	(1619-1677)	イタリア	9
SZÓNYI, Erzsébet [Elisabeth]	(1924- )	ハンガリー	1
SZYMANOWSKA, Maria Agata Wotowska	(1789-1831)	ポーランド	1
TAGASIRA Yuuko [田頭 優子]	(1957- )	日本	2
TAILLEFERRE, Germaine (Marcelle)	(1892-1983)	フランス	9
TAKASIMA Midori [高嶋 みどり]	(1954- )	日本	1
TALMA, Louise	(1906- )	アメリカ	1
TCHEMBERDJI, Katia	(1960- )	ロシア	2
TELFER [Lindsey], Nancy (Ellen)	(1950- )	カナダ	1
THOMAS, Augusta Reed	(1964- )	アメリカ	1
TOWER, Joan	(1938- )	アメリカ	3
USTVOLSKAJA, Galina Ivanovna	(1919- )	ロシア	2
VELÁZQUEZ, Consuelo	(1920- )	メキシコ	1
VIARDOT [née GARCIA], (Michelle Ferdinande) Pauline	(1821-1910)	ドイツ	8
WATSON HENDERSON, Ruth (Louise)	(1935- )	カナダ	1
WOLFE, Julia	(1958- )	アメリカ	1
YI, Sung-Chen	(1963- )	韓国	1
ZAIMONT, Judith Lang	(1945- )	アメリカ	2
ZECHLIN, Ruth	(1926- )	ドイツ	1
ZWILICH, Ellen Taaffe	(1939- )	アメリカ	2

計 139名

【協力】市川啓子

---

## ソフィー・ドリンカー研究所（ドイツ、ブレーメン）

玉川 裕子（たまがわ ゆうこ）

---

2003年12月、私は現在翻訳中の著作の筆者フライア・ホフマン Freia Hoffmann を訪ねてブレーメンに飛んだ。同地での宿泊先は、彼女が所長を務める「ソフィー・ドリンカー研究所 Sophie Drinker Institut」内のゲストルームである。この機会に同研究所のあらましを知る機会を得たので、以下に紹介したい。

同研究所は、ブレーメン駅から徒歩で7,8分ほどの所にある。十九世紀後半に建てられた建物の地階から2階を占めていて、道路から10段ほど上ったところに建物全体の入口がある。この扉を開けて建物内に入ると、短い廊下の突き当たりには研究所1階の入口がみえる。この扉を開けると、大きなテーブルが置かれた閲覧室兼視聴室に入ることになる。この部屋をはさんで道路側には資料室、その反対側には小さいが、ガラス張り温室のような所長ホフマンの研究室がある。この階にはさらに、閲覧室脇の小さな台所と、いったん廊下に出た左手に位置する研究員クリスティン・ハイトマン Christin Heitmann の研究室がある。2階にはミニコンサートや小規模のシンポジウムを開くことのできるグランドピアノの置かれた部屋と研究室、さらに地階には研究室のほか、ゲストルームとコピー室兼倉庫が並んでいる。地階といっても道路から階段を上ったところに一階があるので、地階は道路と反対側にある中庭と地続きになっている。全体に窓が大きくとられ、大変明るい。シンプルな家具調度とあいまって、ゆったりとした気持ちのよい造りである。

この研究所は、女性およびジェンダーの視点による音楽学研究を目的として、2001年3月に設立された。研究所の名称として選ばれたソフィー・ドリンカーは、1948年に女性と音楽についての研究書を著したアメリカの音楽学者で、同書の邦訳が出版さ

れ、また訳者の水垣玲子さんに研究会でお話をうかがったこともあるので、フォーラムのメンバーにはお馴染みだろう（『音楽と女性の歴史』、学芸書林、1996年）。同研究所が設立された当時、ドイツにはすでに音楽における女性研究のためのアルヒーフとして「女性と音楽のためのアルヒーフ Archiv Frau und Musik」（カッセルからフランクフルトへ移転）があった。同アルヒーフがどちらかといえば楽譜や音源の収集に力を注いでいるのに対して、ソフィー・ドリンカー研究所は、女性と音楽に関わる研究書や論文、および史料の収集に力点を置いている。その際、扱う資料を芸術音楽関係に限定することなく、ジャズやロック、ポップスなどの領域も守備範囲とし、また西洋音楽のみならず、非ヨーロッパ音楽にも視野を広げることがうたわれている。

実際、資料室の棚に並んだ本を眺め渡してみると、女性と音楽に関わるもので、ドイツ語で書かれたものであれば、網羅的に集められているという印象であった。（もちろん、一部英語の研究書もあったが、こちらは網羅的とはいかないようである。）作曲家の個別研究としては、クララ・シューマンやファニー・ヘンゼルが目についたが、これは研究所による選別の結果というよりも、女性と音楽をテーマとした書籍の出版状況を忠実に反映したものだろう。これ以外には芸術音楽、ポピュラー音楽を問わず、歌手についての伝記が多いように思われた。これは出版状況云々以前に、歴史的にみて声楽の分野が女性音楽家に比較的多く活動の場を与えていた——演奏以外の役割も含めて——ことと関連あるだろう。しかしいずれにせよ、さほど大きくない資料室の棚の半分以上が空いている状況は、女性と音楽というテーマに関わる書籍の出版がいかに少ないかを視覚的に示しているように思われた。

書籍が並んだ棚の向かい側には、女性作曲家の楽譜類のほか——数はそれほど多くない——、さまざまな論文集や雑誌、パンフレット類などから集められた貴重なコピーがファイルされたバインダーが並んでいる。これは、重要な雑誌に関しては雑誌別に（たとえば『音楽新報 Neue Zeitschrift für Musik』、

『教育音楽 Musik im Unterricht』など)、その他は著者のアルファベット順にファイリングされている。

研究所の課題としてはさらに、女性作曲家の作品集出版や研究に資するための遺品の収集がうたわれているが、もちろんこれは女性作曲家の作品を網羅的にというわけにはいかず、精選される。現在、ルーマニアの作曲家ミリアム・マルベ Myriam Marbe(1931-1997)の遺品が遺族によって永久貸与されているということである。たまたま私の滞在中にマルベの研究者が訪れていた。

また、他の図書館やアルヒーフにオリジナルの手稿譜が収められている女性作曲家の幾人かについては、そのコピーが集められていた。その代表格は、ホフマンとハイトマンが中心となって編集にあたった作品選集が昨年完結したルイーゼ・ファランク Louise farrenc だろう (全 13 巻、出版社 Florian Noetzel Verlag)。

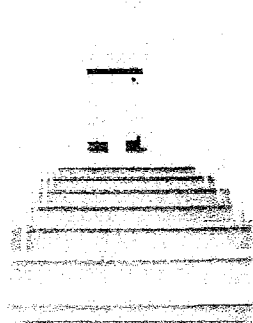
もうひとつの重要なコレクションは、「第三帝国の作曲する女性たち」というテーマのもとに集められた史料類である。これは、クラウディア・フリーデル Claudia Friedel が上記テーマで執筆して、オルデンブルク大学に提出した博士論文『第三帝国の作曲する女性たち。実像と支配的な女性像の再構成の試み』 *Komponierende Frauen im Dritten Reich. Versuch einer Rekonstruktion von Lebensrealität und herrschendem Frauenbild, Hamburg und Münster 1995* のために収集した資料がもとになっている。

書籍にせよ、雑誌論文や楽譜その他のコピー類にせよ、もちろん電子カタログ化され、同研究所のホームページにアクセスすれば、日本からでも簡単に調べることができる (<http://www.sophie-drinker-institut.de/>)。コピーのコピーを依頼することはできないので、日本にいながらにして同研究所所有の資料をすべて閲覧できるわけではないが、少なくともある対象についてどのような文献があるかを調べるには大変便利だろう。ちなみに、このホームページを通じて、オルデンブルク大学の図書日録にアク

セスすることも可能である。

資料収集以外に、研究プロジェクトを立ち上げたり、若手研究者を育てる (そのための奨学金制度あり) ことも、同研究所の目的としてうたわれている。こうした活動を財政的に支えるのは、「芸術および音楽領域における女性の活動促進のためのマリアン・シュテークマン財団」(代表エヴァ・リーガー Eva Rieger) である。1939 年ベルリンに生まれ、2001 年に死去したマリアン・シュテークマン Mariann Steegmann は、リヒテンシュタインの重要な芸術コレクションの相続人のひとりで、いくつかの財団を設立して社会的・文化的領域に貢献したとのことである。

ソフィー・ドリンカー研究所の設立は、音楽をめぐる諸問題をフェミニズム・ジェンダーの視点から再検討しようとするフライア・ホフマンやエヴァ・リーガーらの個人の熱意なしには決して実現しなかつただろう。しかし同時にまた、まずは歴史に埋もれた女性作曲家の発掘作業から始まった音楽学領域におけるフェミニズム・ジェンダー研究が、作曲家および作品研究にとどまらず、さまざまな対象に、幅広い、学際的な視点からアプローチしていく段階に入ってきたという状況が、同研究所の設立を後押ししたことも間違いない。私たちが今立っているのは、しかし、あくまでもそのとばくちにすぎない。研究所資料室の空っぽの書架は、今後さまざまな研究によって埋め尽くされることを待っている。



ソフィー・ドリンカー研究所  
(ホームページより)

---

## 遅咲きの花—IAWM (International Alliance for Women in Music) メーリングリストの話題から

西阪 多恵子(にしざか たえこ)

---

昨年の6月、IAWMのメーリングリストで「遅咲きの花」late bloomerと題する投稿があり、それに関連する投稿が三篇続いた。本稿ではその概要を紹介し、そこで問題となっている事柄について考えてみたい(註1)

発端は、自作演奏会の資金繰りに苦勞する一作曲家の投稿である。その内容は、恵まれた男性作曲家の例を引き合いに出しつつ、若手を対象とする助成金のあり方に異議を唱え、遅咲きの人々の集まりをつくろうと呼びかけるものであった。年輩の女性作曲家に多くの機会を与えるために、互いに手を携えてあらゆる場で働きかけようという趣旨である。次に、これに関連して、コンクールの最高年齢制限に反対する投稿が載った。その理由として、第一に、投稿者の若い頃には女性作曲家に対する偏見が強く、演奏の機会が与えられなかったこと(女性名であったために指揮者から未開封のまま楽譜を返送された経験が数回)、第二に、創造性や進歩に年齢は関係がないという主張が挙げられている。

三番目の投稿者は、一般にコンクールの目的は若手の育成にあるとしたうえで、次のように述べた。すなわち、こうした年齢制限の背後には、音楽家は20歳代の間も絶えず成長を続けるという暗黙の前提があり、それは男性をモデルとした考えである。現在高齢の女性の多くはこの時期に出産・育児のために勉強や活動の中断を余儀なくされ、こうした競争の場に参加する機会を逸してきた。彼女たちのそうした経験が近年の少子化や高齢出産増加の遠因にもなっている。イギリスでは数年前に音楽女性団体がこの問題を取り上げ、その結果として、制限年齢を引き上げた作曲コンクールもある――。

最後に第四の投稿者は、音楽界一般に対して、年齢に応じた一定のコースを経た者のみを受け入れがちであると批判したうえで、最初の投稿の「遅咲き」という言葉にも疑問を投げかけた。弱さや言い訳めいたニュアンスを持つこの言葉を自ら用いることは、ジェンダーや年齢による差別に対して有効な働きかけをするだろうか。部外者の軽蔑的な笑いを誘うだけではないか、と。そして、ジェンダーも年齢も考慮の対象とすべきではないとの立場から、IAWM作曲コンクール(註2)の年齢別制にも疑義を呈した。

これらの投稿は、具体的な助成金やコンクールについて論じているのではない。(註3)年齢制限や言葉の良し悪しといった論点の背後にある共通の問題は、音楽界ひいては社会全体に及ぶ年齢とジェンダーとの密接な関係、言い換えれば年齢差別と性差別との連動であろう。最初の三篇とくに第二、第三の投稿から読み取れる状況は、男性にとっては差別ではない年齢制限が女性には差別になり得るというものではないだろうか。単純にパターン化すると次のようになる――音楽家として修行を続け、受け入れられ、目的を達成した男性にはコンクールや音楽祭セミナーに応募する必要はない。今や若い才能を発掘し育成する側に立つ彼にとって、年齢制限は差別ではない。だが、かつて女性ゆえに勉強を中断した者、その音楽を拒絶された者は違う。飛躍のチャンスはこれからだ。経済的な自立のためにもそうした機会を必要とする彼女にとって、年齢ゆえの拒絶は新たな差別となる――。

一方、最後の投稿の主旨は、年齢やジェンダーへの言及を忌避し、それらによる区別を否定するものである。ここで懸念されているように、「遅咲き」と銘打った女性の結束は、女性集団が自ら年齢に絡むネガティブな表象を作り出すことともいえる。またそうした観点からみると、上述の性別パターンは、女性のいわば年齢不相応な未熟さを暗示し、女性蔑視を強めるものであるかもしれない。しかし、だか

らといって、このような年齢差別と性差別の連動が個人の努力で克服されるわけではなからう。仮に年齢やジェンダーを超越するかのような活躍によって差別を免れたとしても、そうした個人々の成功が差別を内包する社会の支配構造を変えていくのか逆に強化を促すのか、一概にはいえない。いずれにせよ、年齢やジェンダーによって置かれる状況の違いは大きい。区別とはその違いに対する配慮であり、それなくして一切を個人の可能性に委ねるならば、女性たちが体験してきた事柄を不問に付し、差別の不可視化を進めることにもなりかねないのである。<sup>(註4)</sup>

かくも根深い問題を打開するには、さまざまな角度から問いを深めていくことが必要なのだろう。そもそも「遅い」という判断自体、男性のライフ・サイクルを尺度としてはいないだろうか。出産関係のみならず、両性の平均寿命の相違等もあわせて考えてみると、例えば働き盛りの年齢層は男性より女性の方が若干上あるいは幅広いようにも思われる。難問打開の糸口は案外身近な生活の中にいくつも潜んでいるのかもしれない。

ともあれ、こうした議論が女性のための団体を基盤として交わされるということの意義は重要だ。音楽界の隅々に埋め込まれたジェンダーの問題が様々な経験と立場から掘り起こされていく。「個人的なことは政治的なこと」という三十年余りも前のフェミニズムのスローガンはここではいささかも古びていない。ちなみに、前述した IAWM 作曲コンクールの昨年度入賞者のほとんどはすでに国際コンクールの入賞などの実績を上げており、IAWM に音楽家として成功した女性も多いことが察せられる。成功に至るまでの経験を通じて女性の連帯の必要性を認識した者も多いだろう。こうしてなされる問題提起は、やがて女性のみならず音楽界全体にとってよき実を結ぶのではないだろうか。(IAWM ホームページ <http://music.acu.edu/www/iawm/home.html> 入会案内は membership のページへ)

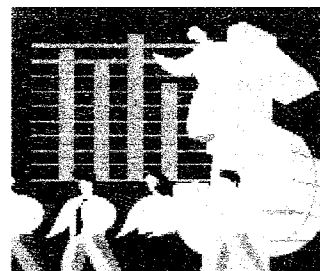
< 註 >

註1) 投稿者は以下の通り(投稿順): Naomi Stephan(米・作曲家 1939 生)、Nancy Bloomer Deussen(米・作曲家 1931 生)、Margaret Lucy Wilkins(英・作曲家 1939 生)、Kathleen Pierson(米・作曲家 作曲家 Kala Pierson の母)

註2) 第23回(2004年)は6部門あり、応募資格はいずれも IAWM 会員であることその他、以下の通り。( )内は編成・曲種。リビー・ラーセン賞—在学中の女性(限定なし)、エレン・ティフ・ズウィリッチ賞—21歳以下(限定なし)、セオドア・フロント賞—22歳以上(室内楽または管弦楽)、ミリアム・ギデオン賞—50歳以上(ソロの声と5つ以下の楽器)、ジュディス・ラング・ゼイモンツ賞: 30歳以上、これまで録音あるいは出版された作品のない者(大規模独奏曲または室内楽)、ポリーン・オリヴェロス賞—制限なし(電子音楽)。

註3) 国際的な作曲コンクールに関する限り、年齢制限は必ずしも通常の条件ではない。例えば『世界の国際音楽コンクール全ガイド(2002~03年版)』(ショパン)掲載の作曲コンクール86件のうち、年齢制限なし34件、年齢についての記載なし22件、不明2件。年齢制限の明記された28件のうち、下限のみ2件、年齢別(上限なし)2件。上限のみ24件の内訳は、35歳7件、40歳6件、最高は45歳で2件、最低は26歳1件、他8件となっている。なお、日本の作曲コンクールでは年齢制限のあるものはさらに少ない。

註4) 平等を達成する手段としての区別の必要性は、差別との闘いにつきまとうジレンマである。その制度化というべき積極的差別解消策(アフターマティヴ・アクション)はマイノリティの地位向上に成果を挙げてきたが、逆差別論という反撃に遭うことも多い。



# コンサート情報

★当女性と音楽研究フォーラム主催のコンサートの開催が本決まりとなりました。プログラム、演奏者等の概要は、以下の通りです。準備を進めていますので、ご協力をお願いします。

女性作曲家を聴く・その6

ルイズ・ファランク Louise Farrenc (1804-1875) 生誕 200 年記念コンサート

<プログラム>

フルート三重奏曲 ホ短調 作品 45 (1862)

ピアノ五重奏曲 第 1 番 イ短調 作品 30 (1842)

六重奏曲 (ピアノ+木管 5 部) ハ短調 作品 40 (1852)

九重奏曲(弦 4 部+木管 5 部) 変ホ長調 作品 38 (1849)

<出演者>

松原 勝也(ヴァイオリン) / 川本 嘉子(ヴィオラ) / 藤森 亮一(チェロ) / 吉田 秀(コントラバス)

佐久間 由美子(フルート) / 広田 智之(オーボエ) / 高橋 知己(クラリネット) / 吉田 将(ファゴット)

吉永 雅人(ホルン) / 長尾 洋史(ピアノ)

日時 : 2004 年 10 月 30 日 (土) 14:00 開演

会場 : 東京文化会館小ホール

入場(予定) : 一般 4,000 円 学生 3,500 円

## レクチャー報告

「閉ざされた扉 ~音楽室には登場

しなかった女性作曲家たち~」

講師 : 小中慶子

藤村 晶子 (ふじむら あきこ)

去る 1 月 31 日北とびあにて、小中慶子氏の「閉ざされた扉——音楽室には登場しなかった女性作曲家たち」と題されたレクチャーが行なわれた。会場となった会議室正面には女性作曲家たちの肖像、そしてこれを斜め横からうかがうように、壁際に J.S. バッハやベートーヴェンら、学校の音楽室でお馴染みの肖像画が貼られている。レクチャーは女性作曲家を知っているかという問いかけから始まり、参加者からはクララ・シューマン、シャミナード、森山良子などの名があがった。続いて、では作品から男性、女性の判別は可能かということでは幾つか作品を聴くが、もちろん性差が聴こえるはずもない。長い歴史の中で、女性作曲家には扉が「不当にも」閉ざされてきたことを実感させるに十分な導入である。

レクチャーは「音楽史にみる〈男性〉と〈女性〉」、「19 世紀の女性たちと音楽」、「女性と作曲をめぐる」の三部から成り、音楽作品における旧来のステロタイプな「男性/女性らしさ」の分類、および偏った女性観の歴史的背景を概観したのち、ファニー・M.ヘンゼル、クララ・W. シューマン、アルマ・S. マーラー、ルイズ・D.ファランク、ジェルメーヌ・タイユフェール、エイミー・C.ビーチなど、計 6 名の作曲家が紹介された。

小中氏は「女性と作曲」の問題として、作曲行為そのものの禁止、出版規制、女性には作曲が不可能とする偏見の存在などを挙げ、上記 6 名の生涯と作品に詳しく触れながら、時代のジェンダー規範との葛藤の中で創作せざるを得なかった、彼らの様々な実例を呈示した。6 名の個性も時代状況も異なるものの、複数の問題が錯綜しつつ「女性の作曲」を抑圧する構造が浮かびあがり、またそれゆえに「女性作曲家」の多様性も示し得たと思われる。配布されたレジュメも丁寧に整理された内容で、理解の助けになった。しかし一方で、6 名の作曲家を結ぶ共通項が「女性であること」以外に見えにくかったことも事実だ。今回とりあげた作曲家が 19 世紀以降の比較的裕福な欧米女性であり、すでに音源資料も存在する点は言及されてもいいのではないか(質疑応答で補足)。彼らの音楽は日本でも受容され始めているが、その際「西洋」や「近代」はどれほど認識されているだろうか。いわゆる音楽史が西洋近代の所産であり、多くが作曲家中心の記述であること、この前提抜きに「女性作曲家」の問題は語り得ないように思う。何より我々が無自覚に内在化させている価値基準を問う視線が、「音楽室の肖像画」——音楽史批判には不可欠であろうから。

当日のレクチャーは二時間半に及んだが、20 余名(男性 2 名)の参加者はメモをとりつつ熱心に聞き入っており、関心の高さがうかがわれた。音楽が多く聴けたことも個人的には嬉しい。会場との意見交換の時間がもう少しあれば、なおよかったように思う。

# ニュース, etc.

## ■ 会員の講座、レクチャー、コンサート続く

このところ、各地の自治体や女性センター主催の講座や講演会に、当フォーラム会員が「女性と音楽」のテーマの講師として相次いで招かれ、活躍しました。

1月14日 「すばらしい女性作曲家たち」講師：小林緑 杉並区+杉並女性団体連絡会 共催

1月22日・29日・2月5日 教養セミナー「音楽史の中の女性～女性作曲家を聴く」講師：小林緑 千葉市女性センター主催

1月31日 女と男のアートシリーズ最終回「閉ざされた扉～音楽室には登場しなかった女性作曲家たち～」講師：小中慶子 北区女性センター主催 ⇒18頁に藤村氏による報告があります。

2月12日 公開コンサート「音楽史の中の女性～女性作曲家を聴く」構成・話：小林緑 千葉市女性センター主催 ⇒曲目、演奏者等は、ホームページ「関連コンサート・イベント情報」に掲載されています。

## ■ ベルンにて、ファランクの「ポートレート・コンサート」開催

今年1月23日から25日にかけて、スイスの女性音楽フォーラム(FMF)主催により、ルイーゼ・ファランクの作品を集めた「ポートレート・コンサート」がベルン音楽院大ホールで開かれました。曲目は、六重奏曲、九重奏曲、ピアノ五重奏曲第1番及び第2番、ピアノ三重奏曲、チェロとピアノのためのソナタ、そしてフルート三重奏曲、といずれも室内楽曲。これに先立つ21日にはハイトマン教授による講演がベルン大学で行われ、ファランク

における伝統と獨創性やベートーヴェンとの関わりについて論じられたとのことです。生誕200年にふさわしいこの音楽祭で、主催者にとって唯一の心残りは、オーケストラと折り合いがつかず、交響曲をプログラムに入れられなかったことだとか。

## ■ ファランク・コンサートに助成決定！

本年10月30日に当フォーラム主催で開催予定の「ルイーゼ・ファランク生誕200年記念コンサート」に対して、助成を申請していました財団法人花王芸術・科学財団より、2月9日助成決定のお知らせをいただきました。助成金額は30万円です。ご芳志を無駄にせぬよう、ぜひ成功に導きたいものと思います。

## ■ ザ・ウィメンズ・フィルハーモニック解散

サンフランシスコを本拠とする管弦楽団、ザ・ウィメンズ・フィルハーモニックが今年3月7日のコンサートをもって23年の歴史を閉じることになりました。本号で高橋氏が論ずる女性オーケストラの時代よりはるか後の1981年、音楽界における女性の機会均等を求めて発足した同楽団は、団員、指揮者とも女性だけから成り、これまでに160人以上の女性作曲家による作品の演奏やシンポジウムの開催など意欲的な活動を展開してきました。しかし、ここ数年は財政危機に見舞われ、幾度か定期公演のキャンセルに追い込まれるという苦境が続いていたようです。同楽団代表ロビン・ブラモール氏は、今後とも関係諸団体等と協力し、音楽界における女性のさらなる状況改善に尽くしたいとしています。

## <編集後記>

「会員自己紹介コーナー」では、多彩な会員の顔ぶれに改めて驚かされ、心強く思いました。未掲載の方、次号へのご寄稿をお待ちします。

(市川・西阪)

## 女性と音楽研究フォーラム会報 第4号

Bulletin of Women and Music Study Forum Vol.4

編集・発行 女性と音楽研究フォーラム事務局(市川啓子・西阪多恵子)  
発行日 2004年2月29日(日)